第７回あきる野市絵画展
入賞・入選作品集

あきる野市長賞（最優秀賞）　中村清作「あきる野 FOREST」

教育長賞（優秀賞）　神山茂久「あきる野台地・夏」

主催　第７回あきる野市絵画展実行委員会・あきる野市教育委員会

第７回あきる野市絵画展

第７回あきる野市絵画展は、あきる野市の生涯学習推進をめざし、文化的で魅力あふれるまちづくりと地域の芸術・文化の振興を目的として、秋川流域の風景・風俗・行事・史跡・静物・人物などをテーマに制作した洋画（油彩・水彩・アクリル・パステル画）作品を広く市内外から公募し、優秀作品を称揚するとともに、入賞・入選作品を展示・公開するため、、市民で組織した第７回あきる野市絵画展実行委員会とあきる野市教育委員会との協働により、公募展として実施いたしました。公募の結果、あきる野市内外の皆様より６９点の作品をご応募いただきました。

応募作品の審査にあたりましては、埼玉大学名誉教授の吉岡正人氏及び帝京大学教授の岡部昌幸氏のお力添えを賜り、あきる野市長賞（最優秀作品）１点、教育長賞（優秀作品）１点、審査員特別賞吉岡賞１点、審査員特別賞岡部賞１点、秀作５点、佳作７点及び入選作品４０点をお選びいただきました。厚く御礼申し上げます。

今回のあきる野市絵画展「入賞・入選作品展」並びに「特別展」は、 新型コロナウィルス感染拡大防止対策により、表彰式、審査員による展示会場での作品コメントを含め、残念ながら中止となりました。そのため、入賞・入選作品すべての講評を掲載した冊子をつくることになり、ここにお届けいたします。

本絵画展を通して、多くの方々が秋川流域の自然が育む美しさや地域の優しさ、郷土愛を感じていただけたら幸いです。

皆様方から寄せられたご意見やご要望を踏まえ、次回のあきる野市絵画展の開催に向けて努力して参りますので、今後ともご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

第７回あきる野市絵画展実行委員会・あきる野市教育委員会

▽公募期間　　令和２年２月２１日（金） ～ ２３日（日）
▽審 査 日　　令和２年３月　２日（月）
▽受付･審査　あきる野市中央公民館（別館１階第２工作室・第５研修室）
▽応募総数　　６９点（油彩３５点　　水彩２７点　　アクリル２点　　パステル５点）
▽応募者数　　５６人（市内３１人、市外２５人）
▽審査結果　　☆市長賞（最優秀賞）　１点　（アクリル１点）
☆教育長賞（優秀賞）　１点　（油彩１点）
☆審査員特別賞吉岡賞　１点　（アクリル１点）
☆審査員特別賞岡部賞　１点　（油彩１点）
☆秀　作　　５点　（油彩３点、水彩１点、オイルパステル１点）
☆佳　作　　７点　（油彩３点、水彩３点、パステル１点）
☆入　選　４０点　（油彩２１点、水彩１９点、アクリル１点）

▽審 査 員　　吉岡正人氏（埼玉大学名誉教授・二紀会理事）
　　岡部昌幸氏（帝京大学教授・群馬県立近代美術館館長）

▽入 賞 者　　１６点　　（以下、敬称略）

◎市長賞（最優秀賞）　中村清作「あきる野 FOREST」

〇教育長賞（優秀賞）　神山茂久「あきる野台地・夏」

〇審査員特別賞（吉岡賞）　大山　学「あの日の流れ」

〇審査員特別賞（岡部賞）　関　義夫「公園」

〇秀　作　森田　利明「秋川新緑に向う」　山村　昭一「休日」
　　川北　　茂「東秋留橋の午後」　濱中　　斉「御岳渓流の想い（多摩川）」
　　木村　俊次「うつろう春」

〇佳　作　在原　　晟「水辺」　島田　雅由「獅子舞う」
　　萩原　茂男「華年の回想」　伊能　秀雄「冬アザミ」
　　橋本　雅子「暮れなずむ秋留台地」山崎　康雄「秋の秋留台公園」
　　山野井　恵美子「夏の収穫」

〇入選　４０　点

坂本　美郎「蔵のある風景」　服部　利美「白いシーツに包まれて・・」
雨宮緋佐子「すゝきの波」　浅葉　三男「初夏、草花公園」
小黒　伴子「山水の池」　羽村　伊左雄「樹勢」
藤原　加代「廃屋」　内野　信　　「大樹の秋」
長峰　弘子「散り行く銀杏（広徳寺）」　小澤　繁明　「払沢の滝」
新井　泰道「あじさい園にて、ハイポーズ」　青野　光蔵「動と静の峡」
小林　房江「あきる野産　やさい」　倉畑　久美　「のらぼう咲いて」
菊池　　緑「夕映えのメタセコイア」　小宮　勇　「花」
髙木　　綠「岩瀬峡の秋」　内藤　光子「お米がとれたよ～（横沢入）」
大瀬　弥恵子「蓮の花」　松本　忠男　「弟の肖像」
雨倉　久一「水中のカーニバル」　野澤　勝　「秋光の広徳寺」
会田　洋三「“結氷”払沢の滝」　小林　勝郎「春、ほころぶ」
宇田　博　「近所の桜」　小野　政子「樹霊の光（五柱神社）」
久野　友子「森の奥へ」　栗田　義男「急流」
頃末　和夫「晩秋の山門」　野沢　綾子「からすうりとねこ」
岩城　美子「作付け準備」　山口　惠子「広徳寺」
増田　美枝「桜咲く西光寺」　武田　智幸「夕闇のキララホール」
山﨑　國生「真アジと柚子」　堀　由美子「広徳寺へ遠足」
中田　修　「おいしい空気だね～」　木村　初子「さくら」
榎本　スミ子「あじさいと野の花」　田嶋　清子「ジャーマンアイリス」

※「表彰式」新型コロナウィルス感染拡大防止のため、中止
「入賞・入選作品展」上記理由により、中止
「特別展」上記理由により、中止

●……　第７回あきる野市絵画展審査員総評……●

審査員　**吉岡正人（埼玉大学名誉教授・二紀会理事）**

審査員　**岡部昌幸（帝京大学教授・群馬県立近代美術館館長）**

審査に当たっては、選ぶ際の基本的考え方として、大賞と准大賞を地域に密着したアマチュアリズムのすごく出ている作品とどちらかというと基礎のしっかりした描写力のある安定した作品とに分けて選出していこうということで、市長賞（最優秀賞）と教育長賞（優秀賞）を決めました。さらに、

（吉岡）今回は、これまで受賞した方もその中に入れるということにしましたので、非常に優秀な作品があったので、今までになかった審査員特別賞的な賞を創って両先生の推薦により大賞に準ずる形の作品として入れさせてもらった。ということです。過去に受賞した作家であっても、評価していこうという方向で審査しました。

（岡部）２年に１回のこの絵画展ですけれども、これまで審査にかかわってきて、作家の気持ちとか美術界の状況とかはわかっており、「芸術」というのは一つの方向でだけではないことを実感しております。一つは伝統的な技法の作品で、修練された技術によって、毎年新しいテーマを掲げて、描かれて精進されている作家も何人も見受けられてきましたので、そうした地道な努力をされてきている技巧が高い方にも功労的な賞を出したいと思います。もうひとつは全然傾向が違って、新鮮な気持ちで技法にしてもテーマにしても新しく何のこだわりもなく、自分の世界を描かれている作家も数多くいるので、その中で特別表現力の豊かな作家も顕彰したいということで大きな賞を贈りたいという気持ちになりました。

この絵画展の特徴は、あきる野市は、自然が豊かで歴史と伝統がある画題に富んでいるという地域であることが上げられと思います。かつては、応募で大きなテーマを掲げたこともありましたが、そうした共通テーマがなくても画材に溢れている地域なので、それを非常にうまく捉えている作品が多くあるので、その中で出色なものに大きな賞を与えました。

現代の美術界を見ていくと、絵画の技術は５００年、６００年を代々引き継いで今日に至っているので、伝統的な絵画の技法というものを着実に進められている流れもあるし、もう一つは、アウトサイダーアート、またはアールブリュットといった今までの権威に限らない新しい大衆の中から生まれてくる芸術が、今注目されているので、そういう観点からいうと、市民に開かれていた美術展の中では、今まで見いだされてこなかった才能が出てくるのではないかと期待できます。

それを誘引するのは、画題の広さ、この地域の画題の広さ、そしてこの絵画展の敷居の低さにあると考えます。堅実な写実力のある作家たちと新たな新鮮な作風を求める人達がよく目だったように思いました。

（吉岡）今回は比較的小さい作品の中にも、非常に密度の高い作品もあったので、そういうものもきちんと評価したいと思って、賞など付けていったような感じです。本来ならば、２点出品の作品の中には、２点とも取りたいなと思う作品もないことはなかったんですが、なるべく多くの人を選出したいと考え、今回は２点入選という形は取りませんでした。２点出品して１点落ちた方も決して落ちた１点が悪かったわけではないと考えてください。

（岡部）平成から令和という新しい時代になり、又、社会的なグローバルな視点からローカルな視点までへとなかなか社会の変動も大きな時に、好ましい作品を意欲的に出品された方々に敬意を表したいと思います。

　また、今回小品だけれども密度が高く、世界観がはっきりしている完成度の高い作品が出品されているので、やっぱりそう言ったところを評価したいと考えました。

第７回あきる野市絵画展「入賞作品」

あきる野市長賞（最優秀賞）　　中村清作　「あきる野 FOREST」（アクリル）

（吉岡）非常に楽しげな雰囲気でしかも細部の子どもたち、そういうものも含めて密度をもって描かれていて、しかも表現の方法が、写真的な密度ではなく、絵画的な密度、ある種特徴的な筆のタッチ、特徴的な色使い、描かれているモチーフもあきる野の特徴を捉えています。ここは昨年の台風 19 号でこの場所は流されてしまったとのこと、そういうある種の作者の想いも込められているような、楽しい場所だったなということも感じ取れるような、非常に手を抜かないで、全部きちんと描いているところに好感が持てます。

（岡部）一見素朴な描き方ですけれども、なかなか構図や写実力に力があり、特に光の陰影とか色彩の使い方がなかなか巧みで、１００年くらい前のアバンギャルド（前衛的な）絵画みたいな感じです。すごく描く意欲・気持ちがこもっている。個性豊かな感じで、あきる野のパラダイス的な雰囲気をみごとに表現していると思います。すごく印象深い作品で、今までの絵画展の中で、目を引いた作品で、大賞に値するものだと思います。

（吉岡）最初に見たときから大賞だと感じたものでしたので……

（岡部）樹木の持っている力強さと人物の表現力もすぐれている。

あきる野市教育長賞（優秀賞）　神山茂久　「あきる野台地・夏」（油彩）

（吉岡）絵画技術という意味では非常にすぐれていて、油彩が日本に入ってきて、大正期や昭和初期の大家の描いた作品のような味わい深さ、いわば風格といったものを感じるような描写の作品ですね。ぱっと見、なんの違和感なく入ってくるので、絵って違和感があると、何？といって注目するんだけれど、違和感がないっていうのは、相当力があるっていう意味でもあるんです。これだけの描写力がある人が出品してくれたというのは大変ありがたいですね。

（岡部）日本の近代から現代の洋画壇が作り上げた穏健な写実の系譜を引く作品で、特に緑の表現と土の表現、赤い土の色彩と陰影が見事に表現されていて、あきる野の自然をわかりやすく表現している。台地の特徴がつかめています。高い山並みとか海原とか大河とかいう大きな題材ではなく、非常に穏やかな都市近郊の農業地帯の個性を的確に捉えている。捉えようとしてもなかなか難しいのではないかというものを的確に捉えていて、なかなか類例作もないのではないか。そういったどこでも見られるような風景なのかもしれないけれど、農村の農業の姿が大げさな表現ではなく、等身大の表現がされているような気がします。だから、あきる野のミレーといえるように思います。フランスのミレーのような写実力に、一見穏やかな中に地域特有のものに根ざしているというものが見えて大変好ましいと思います。今まで同様なテーマはいくらでもありましたけれど、一つの様式、一スタイルまで高めて、構図・構成もなかなか巧みです。人間の位置や手前の野菜をしっかり描いているなど。これから絵筆を取る方の模範にも思われ、絵画展の一つの方向性を見せてくれるような絵です。

審査員特別賞　吉岡賞　大山　学

「あの日の流れ」（アクリル）

この方は、２回前に最優秀賞を取られた方で、毎回レベルの高い作品を出品されている作家の方です。作品は小さいが、今までのしっかりした写実から一歩踏み込んだ、川の流れの段差からそこの所に泡がたっている様子を非常に密度のある描写なんだけれど、どこか幻想味があり、ちょっと不思議な感覚もあ

る。ただ上手に描写したという方向でない別の表現が匂ってくる。過去の大賞受賞者だから、あんまり小さな賞だったら、と思っていたが、特別賞ということであれば、それはそれで評価しているということが伝わるかなと思っています。この方向というのはちょっと面白いなと思っていますので、こういうタイプの不思議な感じのするような絵画、もう少し大きい作品を描かれると大きな展開が図れるような期待できるがします。そういう意味で、ちょっと評したい作品です。

今回小品だけれども密度が高く、世界観がはっきりしている完成度の高い作品が出品されているので、やっぱりそう言ったところを評価したいと考えました。

審査員特別賞　岡部賞　関　義夫　「公園」（油彩）

この作品には、自分のスタイルを無理しないで創っている点に惹かれます。内発的なスタイルで素朴ですが、日常に潜む不思議な世界を、巧妙に表現している。特に木の葉の描き方ですが非常に個性的です。ファンタジーの世界を誰のまねということではなく、個性豊かに描いていて、その姿勢を高く評価したいと思います。これからの出品者にも自分の世界をどんどん描いていってほしいという想いを込めて選びました。さらに、未来に向けての夢を感じさせる点も魅力です。古い昭和の思い出だけでなく、未来性のある若々しい感じがするので、このあきる野のイメージにぴったりだと感じました。。

秀作　№4　森田　利明　「秋川新緑に向う」（油彩）

（吉岡）これは、それこそおそらく皆さんが一度は見たことのあるような感じの風景をただ、そこに行って描写されたんだと思うんですけれども、表現の質が非常にいいといいますか特に水の表現が、非常にすぐれているということで、評価しました。私は、あと、石の表現みたいなものも、手を抜かずにしっかりと描いておられて、相対的に非常に密度のある表現になっていると思います。

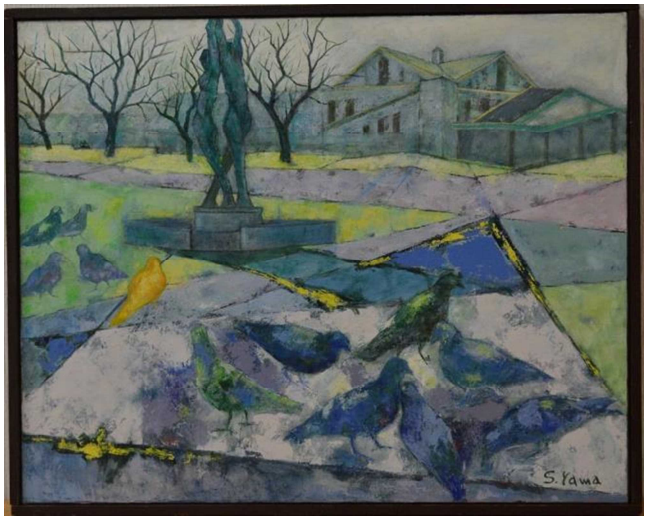
（岡部）総評で、吉岡先生も私も指摘しましたが、小品でも、密度が高いものは評価していきたく思います。この作品はそうした例です。特に水の表現が新鮮というか、今ま

で見たことがない感じがして、これは、あきる野や奥多摩の渓流の雰囲気がすごく良く出ている気がします。

秀作　№17　山村　昭一「休日」（油彩）

（吉岡）ある意味、絵画的にしっかり構成されてよくできた作品だと思います。それなりに自分のスタイルみたいなものをきちっとつくりながら、その中に、幾何学的な面白い構成を入れて、非常にまとまりがいい、しかも鳩がいたり、彫刻があったり、遠景に建物があったりっていうのがすごくうまくバランスをとって、表現されていると思います。こういう作品っていうのは、どこかに、ぎりぎり破綻か破綻じゃないかって言うようなものがあると面白くなるんですけど。今の状況でいくと、黄色いなんか、なんて言うのかな、ブロックの間の線みたいなものが、ちょっと目に違和感のある刺激になって面白い形になっているとは思います。ただ、私の感覚でいうと、空の部分に、もうひと味欲しいかなっていう気はするんですけどね。ただ、いい作品だと思いますし、力のある作家だと思います。

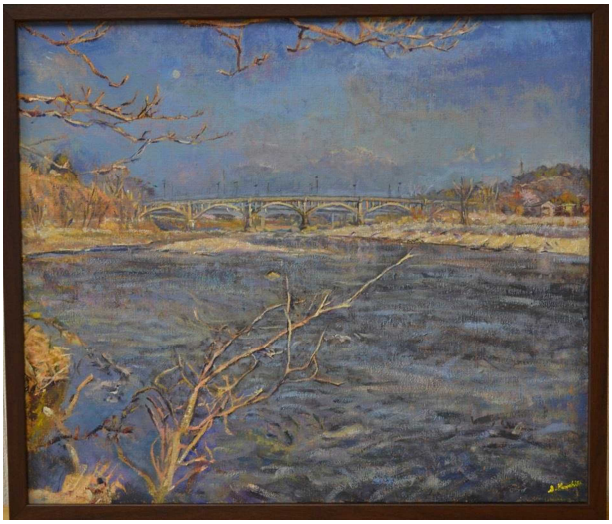
（岡部）今までの出品作の中では、個性豊かな作品で、画面構成をしようとする意欲が満ちているということで評価したのですが、特に秋川駅の駅舎、そして歩道や駅前の具象彫刻などの自然ではない人工的な線と、鳩の持っている独特のシャープな形、立体感が見事に溶けあっています。鳩の形とか枯れ木の持っている自然物の中の有機的なものの中で、多面的なシャープな面がうまく構成されています。大変意欲が感じられますし。地域や社会をテーマにした作品として望ましいと思います。



秀作　№38　川北　　茂「東秋留橋の午後」（油彩）

（岡部）これは色彩と光の作り方が見事で、味わい深いですね、なんかやっぱり多摩の雰囲気がすごく、風が感じられて、小さめの作品なんですけれども、捨てがたいという作品じゃないかなと思いました。

（吉岡）絵の具の付き方がすごく密度を持ってカチッと付いてるんですねこれは多分、下に一層何か色があるのかなあと思います。空の青いブルーグレーみたいな色の表現の下に、少し赤っぽい表現が見えるので、青い色が冷たくならないんで、非常に美しい表現になってると思います。いろんなところに光の当たっている明るい何ていうかな、クリーム色みたいな表現の下にも少し暗い色がある感じがしますんで、そういうその絵の具のくっつけ方ていうものにち



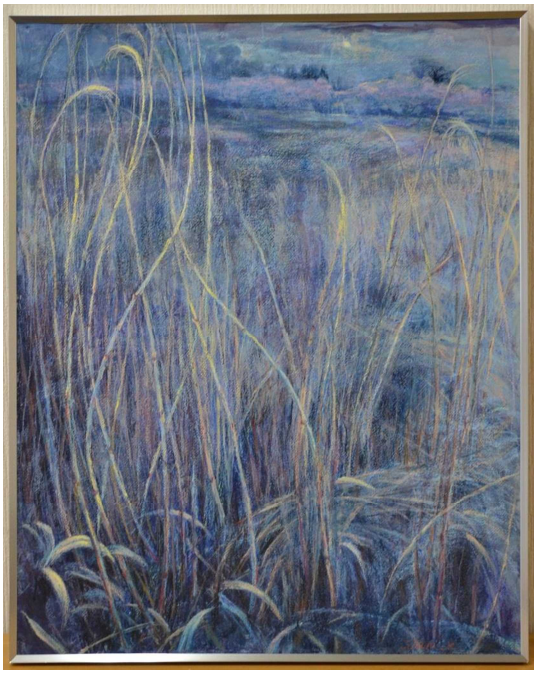
ょっと面白みがあるのかなと。あとは、私は構成として、上の方にちょっと枝が入って、案外、こういうことは、ある程度慣れた人でないとできない表現だと思うんですよね。幹は全然描かないで、見る人に、想像してくださいねで、頭の上にちょっとこうやって枝があって、下からまた枝が入っているということで、左側の方に大きな木があるっていうことまで感じさせるそういう面白い構成だと思います。

秀作　№2　濱中　斉「御岳渓流の想い（多摩川）」（水彩）

（岡部）大型の作品で、画材も大変工夫されているというのが特徴なんですね。フェルトペンのような、線を非常に巧みに利用して、渓谷の温泉宿というか、町並みを見事に表現している。それは素晴らしいのですが、あとは、仕上げの丁寧さっていうのか、それがあればもっといいかなっていう感じです。スタイルとしては非常に面白いスタイルですね。

（吉岡）多分最初に水彩を大きく曖昧な形で塗って描いて、そのあとで、マジックインクのようなもので線を描いて、そのあとでまた白い色で線を描いたみたいな重層的に２層３層の表現が積み重なっている。そういう形だと思います。この積み上げ方がある種の面白さでもあるんですけれども、１度試しにフェルトペンかマジックかわからないんですけど、これを黒以外のものでやってみたいとか、そういうことを、２色を使ってみるとか、そういうことをやってみても面白いのかなと思いました。表現としては、ちまちませずに、非常に力強く、それから大胆で面白いと思います。ただ、何となく雑な感じもその勢いがあるがゆえにかもしれないんですけれども、見えるんで、そういうところをちょっと線のスピードの緩やかなところも入れていったらいいのかなと思います。

秀作　№55　木村　俊次「うつろう春」（オイルパステル）



（岡部）これはオイルパステルで、画材をうまく意外な感じで使いこなしていて、幻想的な世界を見事に表現していると思われます。

（吉岡）構図がちょっと面白いなと、下から枯れたスズキのようなものがバーッと上がってきている。その一番上がり切った辺りに遠くの遠景があって、その向こうに月かなんかはホワッと見えてて、それが遠景のサクラの頭のところにちょっと光を与えているっていうなかなか詩情豊かな

描写だと思います。表現も、水彩で塗られたうえに、明かるい部分をパステルで描き起こしたりして、なかなか表現として深みのあるものが、感じられて、好感を持ちました。

佳作　№6　在原　　晟　「水辺」（油彩）

（吉岡）絵の具をしっかり塗って油絵らしい力強い表現になっていて、そういう絵の具をガチッと乗せていく表現というのは、案外難しい。ものなんですが、大きな筆遣いで、表現がなされているところが、なかなか力のある人なんだろうなあという感じがしました。あとは、その大きなガチッとしたものを、どこまで表面に出していくかっていうのかな。多少の省略とか、もしくは、場合によっては、細かい密度のもの、筆とか筆のタッチとかがあってもいいのかなあっていう感じはしますが、この状態では非常に力強い印象があって、なかなか力のある作家なんではないかと思いました。

（岡部）この作品も大変捨てがたい小品ですね。今まで何百と描かれたあきる野の風景画を見てきたんですけど、この作品には全く見たことがない、川べりの凡庸な風景な風景画ではないと感じました。特に手前の３本の木は力強いそういうところに何か期待するものがあったので、もっと見てみたいなと思いました。

佳作　№31　島田　雅由「獅子舞う」（油彩）

（吉岡）これは何とか祭りとかでしょうか？獅子舞ですね。お面の表現とか、特に後ろにいる巫女さんの顔に赤いのがかかっているところの表現とか、なかなか上手に描けてると思います。何だろうこれ。半紙でしょうか、その表現もなかなか面白いですよね。だからすごくモチーフ自体に魅力がありすぎるとかえって作品が平凡になったりするんですけれども、ここまで描かれていれば、表現として成立しているなっていう感じがする作品です。あと、欲を言えば、もう少し動きがあってもいいのかなあこういう作品はっていう感じがしました。

（岡部）地域の民俗、伝統芸能を題材にですね、個性豊かな作品でわかりやすい作品になっていると思います。非常によくまとまっていますが、それ以上にアピールするものがもう少しあれば、さらにいいんじゃないかなと思います。

佳作　№59　萩原　茂男「華年の回想」（油彩）

（岡部）これは人間の一生を扱ったことを思わせる作品です。人間の一生、長い一生をイメージで連想させています。時代の変化を、肖像を組み合わせて構成することによって、そういう意図がはっきり伝わってくるいい作品だと思うんですけれども、画面の構成としては難しく、構成力をこれから工夫してもらえればと思います。

（吉岡）２点出品の方で、もう一つの作品はある意味、平凡な構成の作品だったんですけれども、そちらの方が、ある意味難がなかったんですが、ちょっと平凡すぎると。こちらの方は、なかなか面白い構成だし、描写の一つ一つも難がなく、新鮮だし、いいんですけれども、やっぱり構成にちょっと無理なところがいろいろ見えるんで、そういう意味では、ぎくしゃくした部分もあるんですが、トータルとして表現としてはこちらの方がいいのかなと思います。真ん中の自転車に乗った。というか、自転車を押した人の自転車部分が半分、水の中に浸かってるように見えるところとか、右上の光の表現とその横の暗い表現の間の落差とか、そういうところが少しちょっと。もう少しうまく表処理できればなという感じはありますけれども、こういう方向で、画面を構成していくっていうのは悪いことではないと思います。

佳作　№30　伊能　秀雄「冬アザミ」（水彩）

（岡部）これは何か田園風景の手前にある、突如、空中に立ち上がるような、アザミなのかわかりませんけど草花が形といい、色彩といい、ものすごくインパクトがあって、なおかつ、生々しいところから枯れてるところまで描くという、何か生命とか、自然を奥深さっていうのを感じるので、非常に異色な作品です。まず、表現の巧みさ、テーマのユニークさが目立ち、評価したく思います。

（吉岡）　水彩の技法的にはしっかりした方だと思います。右下のところからガーッとこうなんていうのかな。龍が上っていくような勢いのある上にかあっとこういくあざみの力強さそれなのに、上に至るにしたがって枯れていって、ていうのが、なんかちょっと、いろんなものを暗示しているようで、結構面白いなと思いました。あざみの緑の葉っぱのところとか紫の花のところとかはなかなか描写として美しい業者になっていて、好感が持てました。

佳作　№42　橋本　雅子「暮れなずむ秋留台地」（パステル）

（岡部）山の端が赤く明かりが残っていて、薄暗がりでしょうか、日暮れ時の、微妙な山の端が、光や色合いを巧みに表現されているところに惹かれました。パステルという画材を、うまく使いこなした点を評価したいと思います。

（吉岡）パステルらしい。色のやわらかな変化がすごく魅力的な作品だと思います。魅力的な部分は空の部分の紫からピンクにかけて、それからオレンジに至る

ところの変化、それから、山の中の色の変化、そういうものなんですね。この作品はパステルにありがちな薄さが感じられなくて、かなり厚い分厚い表現に見えるっていうところが評価できるところかなと思っています。

佳作　山崎　康雄「秋の秋留台公園」（水彩）

（岡部）何か大変ユニークな組み方の、歩道の模様が注目されて、公園の中の人工的な要素に注目して、不思議な幾何学的な世界を生み出したところが魅力です。

（吉岡）部分部分で、表現の方法を変えて、時には点描、時には平塗り、ときには、色分けみたいな感じで、塗られていてそれがある意味やり切っちゃっているので、表現として、なかなか説得力を持っています。こういう表現というのは、描いてる途中は、すごく、大変なんだけど描き終わると。ある程度、効果として見えてくるっていうような感じだと思うんで。ここまで全部をきちっと描ききるっていうのは、なかなかできることじゃないんで、いい表現だなあと思います。

佳作　№60　山野井　恵美子「夏の収穫」（水彩）

（岡部）様々な野菜と竹カゴという道具、新聞紙とその背後の板の木目など、画面のすみずみまでのすべての質感がうまく手馴れて表現されている。特に新聞紙の描写が雑なようでいながら、一番適切な表現となっていて、この地域の産物というものを、非常に温かく描いている気持ちも伝わり、好感が持てました。

（吉岡）一番のやっぱり表現として特徴的なのは新聞紙の表現だと思います。手抜きをすることなく、しっかりと新聞紙の活字なり、それから、写真なりをある程度描写しきっていて、細かい点々としたような文字とかかなり、しっかりと描かれた上の農作物との描き分けっていうのはうまくいってる感じがします。私にとって残念だなと思うのはもう一つ下の床面のような部分が、いまいち平面としてはっきりしない。なんか、右上のあたりの表現などは、細い黒い棒がいっぱいあって、あいだが抜けて見えるぐらい。何となくその床としての手触りがはっきりしない部分が、もう少し何とかならなかったかなという感じがしますけど、それ以外のところは、とてもいいと思います。特に新聞紙はいい表現だと。

第７回あきる野市絵画展「入選作品」

№１　坂本　美郎「蔵のある風景」（油彩）

（吉岡）佳作に非常に近い作品。ある種そつなく描いている作品なんだが、表現の中心というか、何を表現したかったのかが、はっきりしていない。もう少し絞られると、今の技術みたいなものが、より生きてくるのかなあとは思いますけどね。
（岡部）あきる野の地域性や、地域の民家を非常に見事に描いていて、堅実な写実です。ただ、描こうとする迫力が今一つで、惜しまれます。

№８　服部　利美「白いシーツに包まれて・・」（油彩）

（吉岡）おそらく、下に何か色がある上に描かれてるような気がします。多分赤っぽい色かなあっていうよろしますけれどもそういう地塗りの上に書いているもしくは最初に下の色があった上に描いたのかもわかりませんけれども、そういう下の色の効果があって、絵の具の質感が薄っぺらくなくてカチッと描かれているところが魅力だと思います。これもどこが主役なのか。とかがもう少しわかるように、何が描きたかったのか、色なのか、形なのか、光なのか、そういう、どこの形なのかっていうのの抑揚がもう少しついてくるとよかったのかなあと。あともう一つは、構成みたいなものが、もうちょいうまくいってると、もっとこう、表現したいものが、鑑賞者に伝わってくるのかなと思います。
（岡部）果物の輝きと、川の輝きがすごく見事に描かれ、新鮮に感じますけれど、ただ、全般的な構成をしようとするまとめ方がちょっとぎこちない感じ、堅苦しいかなと感じますので、もっと伸びやかに描いたほうがいいかなと思います。

№９　雨宮緋佐子「すゝきの波」（油彩）

（吉岡）　結構、なんていうか、勢いのある筆のタッチで、すごく特にすすきのところの表現はよくできていると思うのです。ただ、その背景の、山なんかなあ、茶色いところ、そこの表現が、今のままだと、なんか絵の具を最初の塗りっぱなしのように見えてすごく損をしている。書けばいいわけではないんだけれども、こちらのすすきに比べるとそこんところが、やっぱり、絵としてちょっと表現が弱くなっているので、その辺をちょっと頑張って、バランスを取ってやられると、１個１個見てると表現する力はあると思うんですよね。あとは、あまり描きたくないところをどうやって描くかっていうことを考えられるといいのかもしれないですね。
（岡部）モチーフが印象的です。すすきのやわらかい感じ、波打つ感じが、タイトルにぴったりです。画面の大きさに比べて、さらに構成力を考えてもら

えればいいんじゃないかなと思います。

№10　浅葉　三男　「初夏、草花公園」（油彩）

（吉岡）大変楽しげな画面で、手前に草や花が、チラシてあるのも効いているし、それらのところに、若干荒っぽいんだけど、面白い形の雲があるのも、この絵の中では、アクセントになってて面白いなとは思います。あとはもう少しこうなんていうのかな仕上げにきちっと密度を持って仕上げて描き切ってもらえればいいのかなあっていう気はしますけどね。それと、あとは色の出し方が、現状、やや生っぽい部分が見受けられるんで、中間の色のところにもう少し変化があると。面白いのかなとは思います。

（岡部）手前の草から野辺の花というのか、花からね、木の真ん中に堂々と生えて、茂っている木の形や、非常に個性的な白い雲の形とか、すごく一貫して、構成されていますね。なかなかいい作品で、ねらいがすごく良く出てるんですけれど、さらに大きな構想が伝わればよいと思い、ちょっと惜しいかなという感じですね。

№13　小黒　伴子　「山水の池」（油彩）

（吉岡）はっきり言ってわからないんですよ。うん。感じとしては、上のところから水が落ちて、こっちの何か流れの方に来てるんですけど。鯉がいるところがどういうところに？この上の方はわかるんですけどね、だからこれ、多分あそこガラスなのか、水槽？、そういう物があるのかしらね。ちょっと面白いっていえば、面白いんだけど、不自然っていえば不自然なのでその辺が、ちょっとどうなのかなあっていう感じはしました。ただ、全体の色のバランスだとか、それから、鯉の赤いものをピッピッとて入れていく表現などは、なかなか面白いものがあるなと思って。この表現、ガラスなのかどうか、よくわかんないけどあそこのところがどういうものであるかっていうのが、もう少しはっきりわかると。よかったのかなあとは思います。

（岡部）やはり個性的なテーマなので、十分目を引いたんですけれども、感覚的にわかるんだけれども、その曖昧さが残っているので、もう少し表現力を高めてもらいたいです。

№19　羽村　伊左雄「樹勢」（油彩）

（吉岡）大変よく描いているし、すごく意欲的な作品だと思います。木の間からの木漏れ日みたいなものに対して下から見上げている人物がいて、というときにあげてるのかな。それで向こうの山門があってその向こうにまた空間が抜けていたりとかっていう。そういう部分を、非常に的確に描写されて、大変よくできていると思います。よく言うと、下半分に対して上半分の表現が、もう少し対比的に、光をもっと感じるさせるためには、できたら暗いものをもう少しシルエット状にクックと入れていくとかすると、木漏れ日の光みたいなものをより強く新鮮に出てきたのかなあとも思います。ある意味、いろんなところに全部きちっと描かれて、どころもそつなく、しっかりと描けていますので、ある種の力

はある方なんだと思うんですけれども、構成とか、要するにねらいにふさわしい形の構成、どこを描きたくてどういうことを表現したいかっていうのをもう少し対象者に、的確にわからせるような形でもっていくと、そういう表現が、多分、平凡ではなく、見せる形になっていくのかなと思います。大変力はあるし、しかも、意欲も感じられる、全部きっちり仕上げていこうっていう欲も感じられる、いい作品だったと思います。

（岡部）一見して堂々とした作品なので強く惹かれたんですけれども、これだけ、同じ場所を堂々として、山門と樹木を長い歴史を感じてさせている樹木を対比させながら見事だと思いますが、一番に効果をねらっている葉っぱなどには、表現がやや単調な点が、惜しまれます。

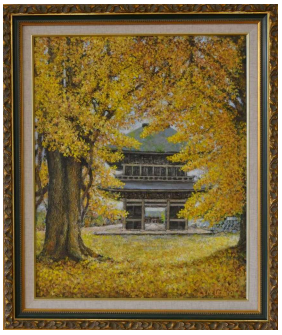
№25　藤原　加代　「廃屋」（油彩）

（吉岡）ちょっと古びたこれは倉庫なのか、民家なのか。民家かしらね、雨戸がしまっていて、１個だけ空いてるような風景なんですかね。かなり時間の経った建物で、屋根の部分がちょっと、トタンが浮いているような感じもなんかそういうここを書きたかったっていうこの作者の気持ちはよくわかる作品です。あとは、例えば、手前側の地面の部分の描写がすっと奥に入っていくような感じやなくて、何となくこう筆跡に見えてしまうというのが草とかに見えないで、それから奥行きをあんまり感じられない描写があったり、あとは、私の感覚でいうと、背景の空の部分の下の部分が曖昧なために、後ろにかえって抜けていかない感じがします空がどこまでいってるのかわかんないんで。何となくその辺に不安感があります。ただこのモチーフに対する目のつけ方などは、なかなか面白いので、あとは、表現として描き切ってもらえればいいのかなあとは思いますけどね。何となく未完成感があって、もっと描けるんじゃないかなっていう気がします。

（岡部）とにかく目新しい題材でしかも現代的。現代では、このような廃屋ではないけれど、ちょっと寂れた感じの民家っていうのはいっぱいありますので、現代的なテーマだと思って、その関心が惹かれました。雰囲気がものすごく出てるんですよね。しかし、雰囲気を支える構成とか描き込みっていうのが、今ひとつ。描き込んで、全体の構図も工夫すれば、さらに良いと思います。

№27　内野　信　「大樹の秋」　（油彩）

（吉岡）秋のイチョウの黄葉の中の、山門からその向こうへ掛けての表現なんですけれども、山門のところの表現は大変好ましいと思います。ただ、肝心の黄色い紅葉の葉っぱの表現がやや単調で、見たときに、すごく上の黄色も下の黄色も右の黄色の左の黄色マーカーかなり似たような感じになっていて、この辺にもう少し大きな変化をつける。もしくはそこに、もうちょっと魅力がある黄色になると、全然評価は違ってくるんだろうと思うんですよね。一番表現したいところの表現がやや単純になってしまったのが惜しまれる作品だと思います。



（岡部）イチョウの葉っぱの色づきであるとか、秋の感じ、表現は非常に良く出てるような気がしますけれども、そういうことでは、同じようなテーマはほかの作者にも多くあるので、さらに表現を研究すると良いです。

№32　長峰　弘子「散り行く銀杏（広徳寺）」（油彩）

（吉岡）これは黄色いイチョウの葉がっついている木ともうほとんど枝になってしまった木とが面白い構成になってると思います。黄色い葉っぱがついている木よりもむしろ葉っぱがついてない部分の表現の面白さっていうのは感じられます。あとは下のところに黄色い葉っぱが落ちてるのですけれども、それが葉っぱに見えないというか、何か黄色い絵の具がベターとした感じに見えるので、ああいうところは、数枚でも葉っぱとして筆を止めて表現してあげると、もう少し表現のなんていうのかなあ、リズム感が出てきたのかなと思いますけど。上の方の、３分の１ぐらいの表現はすごく面白いと思います。

（岡部）確かに月並みな題材になりがちなところを、丁寧に観察して、その観察力のすばらしさっていうのは、すぐれていると思います。だから、もうちょっと深みのある表現になればいいかなというふうに思います。

№36　小澤　繁明　「払沢の滝」　（油彩）

（岡部）よくありがちの滝の表現を、個性的に捉えていると思うんですけれども、滝自体の表現が今ひとつ単調かなという気がしますね。筆や色彩を工夫して、表現する滝の表現に迫るといいと思います。

（吉岡）　滝を描きたいのでここの表現をこのモチーフ表現したんだと思われるのに、滝と、それから周りの緑と、岩の表現とがみんな同じぐらいの力で描かれているので、何となく全体に平板になってきてしまったような気がします。手を抜くということではなくて手を入れても抑えて描く方法っていうのは幾らもあると思いますんで。どこを書きたかったのかということが、もう少し、どこをじゃないな。滝であったら、滝の動きなのか、何か冷たい感じなのか、半分、霧みたいにファーッとなってる感じなのか、勢いなのかそういうことを、もう少し、考えられるといいのかなあという。力はあるのですから。これはちょっと全体の総評の中になっちゃいますけど、モチーフは何ですかって聞かれた時に、題材と思ってしまわないほうがいいです。モチーフっていうのは、フランス語なんですけど、英語で言うとモチベーションと動機だから、このようこの絵を描く動機は何ですかって言うと、滝です。じゃなくて、滝の勢いですとか、滝の力強さですとか、そういう動機を考えて、モチーフっていうものはそういうものだということを考えられると、いろんな意味で、どう描くべきかっていうのも見えてくるのかもしれないと思います。

№43　新井　泰道「あじさい園にて、ハイポーズ」（油彩）

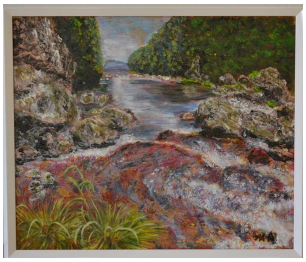
（岡部）これは描きたい気持ちはいいと思うんですけれども、あとは、個々の表現力ですかね。それぞれの人体・犬・アジサイなどの個々の表現力が、ちょっと物足りないかな思います。

（吉岡）おそらく犬とすごい仲が良い女の人がいて、犬と女性と、両方ともに愛情を感じて、描いてるんだなっていうのはわかりますけれども、それが、表現としては、額縁まで一体化して、ある意味で気を使った表現にはなっているんですけれども、やはりもう少し、なんていうかな、描写の質を上げる。その質を上げるのには、油絵の具の使い方ですけれども、少しやわらかく絵の具を溶いたり透明に絵の具を塗ったりいろんな絵の具の使い方がありますんで。そういうこともちょっと考えてやられると、より簡単にもう少し密度が上がってくるのかなあと思います。意欲は感じられるし、なんていうかな、気持ちはわかるんですけれども、あとはもう少し基本的な描写力を少しだけ上げると全然違ってくる作品になると思います。

№44　青野　光蔵「動と静の峡」（油彩）

（岡部）渓谷の周りの緑とか、岩とかの表現が、非常に独特に描かれている。手前の水草なんかも入れてですね、色も新鮮ですね。だけど、残念ながら、ちょっと全体の迫力がない、絵の大きさのこともあるけれども、もう少し、思い切って大作に挑まれるといいんじゃないかなと思います。

（吉岡）じっくり見てると、味わい深い作品ではあるのです。ただ全体として見たときに、やっぱりちょっと、もう一つ、押しが足りないのかなっていう気がします。一つ一つの絵の具のつき方っていうのはすごく面白い表現をされているので、描き方はこのままでいいと思うんですけれども、この描き方だともう少し大きい作品の方が描きやすいかなと。むしろ、そう思います。あとは構成をしっかりして、表現、ここを表現したい、これでいくと水を表現したいのか、岩を表現したいのとがちょっと若干喧嘩してるんですよね。どちらも面白くなりすぎちゃってて、やっぱり見たときに、スッと鑑賞者が入り込めない。ものでもあります。



№45　小林　房江「あきる野産　やさい」（油彩）

（岡部）この作品は非常に、力のこもった作品で大変ユニーク、トウモロコシとか、地域の農産物を使ったものは今まであったんですけれども、その中では、完成度が高いというか作品はしっかりしてる。ものなんですね。だから、これからに期待したいと思います。

（吉岡）よくしっかりの塗り込められていて、緑の部分の色の変化なんかもなかなか面白い作品です。じっくり見て

るとじっくり良さが出てくるような、感じの作品ですが、やっぱり構成が少し悪いと言いますかね、下の地面のところに置いてある玉ねぎじゃがいもトウモロコシのある位置がちょっと窮屈なんですね、上の方が比較的すいてるので、何か下の方がぐちゃぐちゃした感じの印象になっていて、その辺がもったいないと思いますね。構成をしっかりされれば、この絵の具の付きでいけば、いい作品に描けると思いますけど。

№46　倉畑　久美　「のらぼう咲いて」（油彩）

（岡部）これはモンシロチョウがいたり、季節感がすごくある作品で、構図・風景の構造はありがちですけれども、モンシロチョウの組み合わせなどにユニークさが出ていて、いいと思いますので今後期待したい。

（吉岡）結局、面白いところっていうのはそのモンシロチョウを描いたところなんですが、ちょっと離れて見ると、黄色い花の中にモンシロチョウが埋没してしまって、意外と効いていない。せっかく描くのであれば、もう少し効かせてもいいのかなあと思いますし、３匹のモンシロチョウの抑揚が同じであると。こういうのも強い弱いがあったりとかすると、もうちょっといい感じになるのかな。自分の感覚でいうと、黄色いところから離れて、１匹ぐらい畑の上に描かれてもよかったのかなあとは思います。

№47　菊池　緑「夕映えのメタセコイア」（油彩）

（岡部）本当に夕日の日暮れ時の印象深い光と色彩っていうのが、目立ったんですけれども、ちょっと近景の扱い、処理がちょっと不十分かなと思います。自転車の表現をしっかり研究すると良いでしょう。

（吉岡）明るいところっていうか空の部分とか、それからここはそんなに明るくしないほうがいいのかもしんないけど、ちょっとすすきみたいな描写のところ、明かるい部分の描写は、なかなか色に変化があって面白いと思うんですけども。暗いところの描写っていうのが、意外と同じぐらいの明るさで、持って行かれてるんで、もっとこう、夕日に影がぐっと出て深く暗さが出ているところがあって、それで対比されると、もう少し夕日の部分の色の美しさが目に入ってくるのかなあとは思います。

№48　小宮　勇　「花」（油彩）

（岡部）大変画面の迫力ある異色の作品で迫力満点ですけれども、ちょっと大味かなっていう感じがしましたね。もう少し核となる中心があれば、押せるかなという気がします。

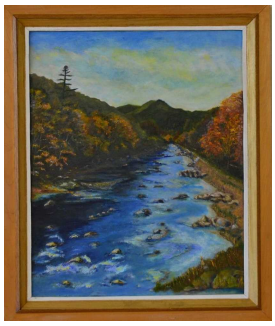
（吉岡）なんか積極的に絵の具をつけて、がっちりしてる感じはすごく好感を持ってますが、筆で散らせた、白い絵の具が、散らしっ放しじゃなくて、もう１回この上に、描いていって、少し調子の中に落とし込んでいけると。より効果的になるのか

なあとは思います。

№49　髙木　緑「岩瀬峡の秋」（油彩）

（岡部）川の水面の透明感など、表現はユニークだと思いますけど。ただ全般的に単調な感じがするところが惜しいです。

（吉岡）本人の狙いがどこにあるのかが意外とわかりにくいかな。全体的にちゃんと描写をされているんだけれども、どこを描こうとしたいのか、木の、黄葉した美しさなのか、空の色の変化なのか、水なのか、この水の中からちょっと顔出している岩のリズム感なのかが、みんな均等に分かれているので、逆に普通に見えちゃうんですよね。どっかに焦点を合わせて、ここはものすごく面白いですよっていうところを、さっきのモチベーションじゃないけれども動機づけみたいなところはっきり自分で認識されると。表現がもっと深まってくるような気がします。



№50　内藤　光子「お米がとれたよ～（横沢入）」（油彩）

（岡部）今回は、家族のポートレートのような作品が何点かあったのですが、その中では、よくかけていて、構図が練られていました。ただし、ポートレートを単刀直入じゃなくて、その背景に深みをもたせる何かの表現が出てくると、いいような気がします。

（吉岡）非常に丁寧によくかけて何か愛情を深く描写しているのはよくわかる。作風でそういう意味では非常に好感が持てるんですけれども、愛情深すぎちゃって、どの顔も同じぐらいに、この子の顔もちゃんと書かなきゃねとか。この子もかわいかったんだよね。とかっていうので、全部出ちゃってて、絵としての抑揚みたいなものがもう少し、非常にこの人はちょっと脇役に徹してもらおうとか。この目立たせるとかなんかそういうものが絵画として出てくると、よかったのかなあと思います。

№62　大瀬　弥恵子「蓮の花」（油彩）

（岡部）これは蓮の花なんですよね。それで、モチーフ自体も、異色だし、新鮮さがある作品なんですけれども、もうちょっと丁寧な表現だったら、よりよかったかなという印象を持ちます。

（吉岡）絵の具の使い方で、大きく白いのを塗ってその上に花を描いたりなんだりして暗いところが暗いところでっていう、絵のの作り方自体はすごく面白いですけれども、やはり仕上がっている感がないというのがちょっと、まだ粗いもう少し書いたら仕上がるんじゃないかなと思えるようなところがありました。

№67　松本　忠男　「弟の肖像」（油彩）

（岡部）大変人物の表情をうまくとらえていて、特に色彩が巧みじゃないかなと思います。

非常に印象深い作品です。もうちょっと強いやはりインパクトが人物にあればいいかなと思い、惜しまれます。

（吉岡）この方も２点出品でもう１点の方が非常に精緻に書かれていて、こちらの方は勢いのある筆遣いで描いていて、こちらの方が生き生きした感じで、表現としては面白いかなと。そういう感じがしました。絵の具の使い方も人物の衣服のところはほとんど透明で背景の部分が結構不透明な絵の具を使ってたりして使い分けも面白いとは思うんですけども。やはりもう一歩、顔の表情とかそういうところに、もう１回失敗するまで描き込んでみて、また少し、元に戻してみたいな、試行錯誤の跡みたいなものがもう一歩出るといいのかな。ちょうど７割ぐらいの仕上がりのちょうどいいところで手を止めているということはある程度自分の表現っていうのがこの辺がちょうどいいなっていうのをわかりながらやってられる方なんだろうなと思うんですけれども、その表現をもう一歩踏み込んで深くしようと思ったら、失敗してでも、一歩踏み込んで見るっていうのもいいのかなと。それぐらいの力はありそうな方ですので、はい。

№68　雨倉　久一「水中のカーニバル」（油彩）

（岡部）大変目新しい題材、内容なんですけれども、ただ、細かく見れば印象深いんだけれども、真ん中の花というか、心証的な花がそれは花なんですかね、なんかわからないけれども、周辺の魚、金魚とかに比べると、真ん中の、花や波紋はわかるけどな、そういうところがちょっと表現が曖昧というのか。まとまりが感じられないということで、これも、次回作に期待したいというところです。

（吉岡）花は、１個、２個はわかるんですけどその横にあるものが、何だかよくわからない。ぐにゃぐにゃしたものがありますんで水仙のような花と、その横の、なんかわからないものの、明るい色の表現が強いがために、せっかく面白く描かれている魚やカエルやカニっていうのが、意外と見えなくなっちゃうっていうのがもったいない気がします。

水彩入選作品

№12　野澤　勝　「秋光の広徳寺」　（水彩）

（岡部）大変キャリアがあることを感じさせる力量のある力作なんですけれども、力作であるがゆえに、なんかもっと根本的な構図であるとか、全体の線の組み建て方などを、軸をしっかりして、持った方がいいんじゃないかと思います。かなり描き込まれてんですけれども、意外にもろいような気がしました。だから、もう１回、構成をしっかりと、見直してみたらいいと思います。

（吉岡）日本に西洋絵画が入ってきた経緯かなというのかな、入ってきたらもっと古いんですけれども、東京の上野の美術学校に、最初に、黒田清輝っていう人がラファエルボランというちょっと印象派もどきみたいな人の作風を入れて、要するに、印象派的な全体から部分を描くっていうものを良しとして、日本の絵画が入ってきてるんですけれども、こ

ういうタイプの水彩が全体から部分っていう意味ではここまで描けました。ここら辺からは、多少、ギクシャクしてバランスを欠いても、一度部分から、しっかり描き上げてみて、そして全体へ持っていってもいいのかなとは思います。そうすることによって、より、物事が見えてくるような気がするんですよね。全体から見ると、全体から部分へっていうふうに見ていくと。大作りな形での描写はできるんですけれども、最終的なところでピントが合わないような気がするんですよね。だから、ちょっとその部分部分できちっと書いてみるっていうところもやってみてもいいのかもしれないと思います。

№14　会田　洋三「“結氷”払沢の滝」（水彩）

（岡部）「結氷」というタイトルで、やっぱり滝が凍ったところを描かれていて、それを白地、紙の地の白も使いながらです非常に独特な筆遣いで、表現されて、非常に特色ある作品なんですけれども、ただ構図に、補助線的な要素を加わるもと、単調ではない深みが出てくると思います。

（吉岡）この滝みたいなものが、おそらく凍ったところなんだろうと思うんですけどその滝の凍ったような形が、妙に生々しい生々しいというか、艶めかしい有機的な形をしてるのがこの絵の面白さだと思うんですよね。そこら辺をもっと見せるためには、白い表現をしたければ、暗いところをよりしっかりと暗くしないと、白いものが見えてこない。のです。ですので、全体的にもう少し暗いところに絵の具を乗っけて深い色にして、そして白の部分をもっと見えるようにしていくと良いのかなあとは思います。

№15　小林　勝郎　「春、ほころぶ」（水彩）

（岡部）桜の咲きかけたところの、つぼみなど、近視眼的描いて、それと円形を組み合わせた、そういうダイナミックの構図が見どころですが、遠近感の表現が今ひとつ適切でなく惜しまれます。ねらいは非常にいいのですけれども、表現がそれに追いついてないかなという気がします。でも大変意欲的だと思いますね。

（吉岡）これは、現実なのか、想像なのかがよくわからないんですけれども、かなりリアルに描かれた桜の枝があり、それが後ろの桜の木から伸びた枝というふうに描かれているんですけど。ものすごくシュールな、なんか、幻想的な枝に見えて、面白い表現にはなってると思います。ただ、それを面白いと思わせるような、もうちょっと作為が、表面に出てきてもいいのかなあと。それから、ぱっと見普通に見えちゃうんですよ。だからその辺のところでこういう向こうの普通の大きな木の一部の枝がビオーンとこっちに出てきてるっていう。遠近感みたいなものがもっとあると面白くなったような気がします。

№16　宇田　博　「近所の桜」　（水彩）

（岡部）住宅地の裏側にある桜の大木という。その違和感が、面白く描かれている。青々とした空が印象深いですけれども、いいところは桜の花の表情がうまく、花の盛り上げ方が上手いと思うんですけどね。だけど、枝の表現を見ると、樹木のメリハリがはっきりしてないから、そこはちょっと貧弱にみえちゃうというような気がします。もっと太い、しっかりとした枝だっていうのがどっかに見えなきゃいけないと思うんですね。もう少し、観察して描けばいいかなっていう気がします。構成が弱くなっちゃいますね。

（吉岡）ある意味、スナップショットと的な、要素が強い構成なので、こういうふうなものを書きたいからこういう構図にしましたっていう。なんか、作者の意図みたいなものがもっとはっきりと出てもいいのかなと思います。自然をそのまま描いて、絵にしたいという感じがするんですけれどももしそうであるならばもっと描写を密度を上げていく必要があるのかなあという。

№18　小野　政子「樹霊の光（五柱神社）」（水彩）

（岡部）大変宗教的なっていうか、終局的な、神秘の光がうまく光の表現が見事なんですけれども、良く仕上がってる作品だとは思うんですが、ちょっと型にはまりすぎているような印象があるのが惜しまれますね。

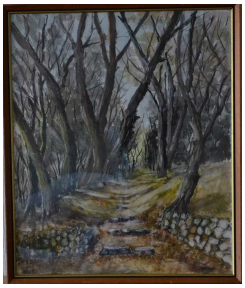
（吉岡）描写力のある人で、大変しっかりと描かれています。石段のところとか、その後ろの社いうか、なんか。そういうものとか、それからそのもっと後ろの木の表現の仕方とか、結構巧みなんですよ。ただ、本来一番、ここをしっかり描いて欲しいと思われる手前の大きな太いご神木の表現が、量感とか重量感とかもう少し感じるように描かれないと。そこが、今のところちょっと平面的といいますかね。量として感じにくい部分がありますんで、そこんところに、量感それから重量感みたいなものが、表現できれば、全然、絵として違って見えてくると思うんです。そこ以外のところがすばらしくよくできてるためにだけに、大変残念な杉のご神木の表現になっていると思います。

№21　久野　友子「森の奥へ」（水彩）

（岡部）大変素直な描写で、生き生きとした光がとらえられていて、木の、生命感なんかもよく描かれてるので、評価したい作品なんですけれども、これもちょっと大きめな水彩画にはみんな共通するのですが、全体の骨太な構図の組み立て方がバランスが悪いような気がしますけどね。だから、勢いの良さがせっかくあるのに、全体の遠近等、しっかりとした建築的な、深みっていうものが、ちょっと感じられないんです。そこも丁寧に作ってもらえばと思います。

（吉岡）真ん中の方にすーと吸い込まれていくような構成。とか、それから、木のいろんな方向に向いている面白さとか、そういう、面白さっていうのは十分感じるんですけれども、木の表現が、さほど抑揚がないというのが、どの木も同じぐらいの絵の具の感じで。

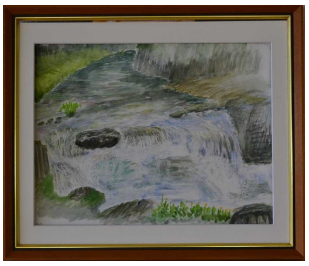
同じように描かれているので、木の下の方といいますかね、根っこに近い部分はかなり頑張って描いてるんですけれども、上の方の枝の先の方にいたるに従って、何となく、雑で何だかよくわかんなくなっているんで、もう少し、そんなに上の方はしっかり描かなくていいんですけれども、やっぱり、ある程度、木になっている表現にならないと、やっぱりしんどいかなっていう感じがします。



№23　栗田　義男「急流」（水彩）

（岡部）渓流の水の流れの輝きと変化っていうのが、繊細さは非常に探求されてる作品なんですけれども、非常にこだわりを感じますけれども、ちょっとこう、うまくいってないところも見受けられるので、今後の研究に期待したいと思います。

（吉岡）真ん中の辺りは一生懸命描かれてるんですけど、周りの方が、やっぱりもう少し、画面としてしっかりと塗り込められていた方がいいのかなあと思います。あと水の表面の平面性みたいなものが、ちょっとうねったりしているのが面白いというのが面白いんですけれども、やはり、あの水としてすーと、入っていく感触が欲しい。そういう部分もあると思います。



№24　頃末　和夫「晩秋の山門」（水彩）

（岡部）これはちょっと表現が単調すぎる。いうか、すごく惜しまれますね。

（吉岡）感じとしては、今のところ、どこが悪いとかどこが変だとかっていうよりは、未完成感がある。もう少し、きちっと描いていければ、もう少し説得力が出る作品かなあと思いますので、ここらで止めるくせをつけないで、もうちょい突っ込んでいく。うまくいかなくてもう少し突っ込んでいく方が、いいのではないかなと思います。

№28　野沢　綾子「からすうりとねこ」（水彩）

（岡部）これも全体的な構図・構成がまとめきれてない気がします。発色にちょっと不十分なところがあって、色の扱いが不十分なところがあります。

（吉岡）カラスウリみたいなものとかはやっぱ、葉っぱがちょっとはっきりしないんですけれども、緑の部分とか、そういうところはそれなりに何か面白い部分があります。後ろの猫なんかも面白いと思うんですがその後ろの背景のところの、ブルーから左に至る茶色のところに至る背景のところが、やっぱりちょっと、空間としてどうなってるのかわかりにくいっていうことがあります。あと、カラスウリの表現なんですけれども、カラスウリの中の、もう少し抑揚つけてここカラスウリは見せたいけど、ここは見せたくないっていうのを、もうちょっとちゃんと、順位づけをしてあげないと。同じようなものがいっぱい画面の中に入って

いる感じが強すぎて、何となくどこ見ていいのかわかんない画面になりやすいので、そういうところはその構成の段階で少し注意されるといいかなと思います。

№29　岩城　美子「作付け準備」（水彩）

（岡部）これはテーマ、モチーフが非常にはっきりしている。あきる野らしい作品だと思うのですけれども、細かなところのやはり描写が、非常に不確かなところがある。畦とか、努力が認められるんだけれども、描写をしっかり勉強されるといいんじゃないかなと思います。

（吉岡）私は下半分は面白いと思うんですけど。上半分の表現が、何となく月並みな感じがして、下の、これ里芋ですよね。そんなもの葉っぱなどの表現は、すごく一生懸命で、トラクターなんかもいいと思いますけれども、上の方の木の表現に至ると。なんか、普通な感じがします。ちょっと面白みに欠ける感じがしますんでそういうところは、しっかり描くもしくは描いたように見せるためにはどうしたらいいかを考える。それからその表現もちょっと薄いのかなっていう、多分、下の方の里芋とか、トラクターとか、人間も含めてですけどその辺は、本人が描きたかったんだと思うんですよね。上の方はさほど描きたい感じがしない。描きたい感じがしないところを、描かなきゃいけないときに、どういうふうに描いたらたら、あんまり目立たないで、しかも、下の邪魔しないで描いたように見せるかっていうのは、多くの絵を見ながら、工夫してみてもらえるといいかなと思います。

№35　山口　恵子「広徳寺」（水彩）

（岡部）このイチョウの豪華な黄色の葉っぱが良くも悪くもユニークなんですけれど。ただ、それほど巧みに感じないので、もう少し、研究を続けられればいいかなっていう気がします。

（吉岡）建物の表現だけはしっかり描こうとしてらっしゃるんだけど。この黄色いイチョウの表現がやっぱり蛋白なんですね。そこら辺は表現としてこの辺は描かないで、パッと見せて、それ以外のところ描くことで、この黄色より美しく見せようというような意図は感じられるんですけれども、この意図を実現化するにはもう少しやっぱり、黄色のところに、手数が欲しいかなっていう気はします。

№37　増田　美枝「桜咲く西光寺」　（水彩）

（岡部）これも大作で、紅白の桜ですかね。それを描こうとした意欲作なんですけれども、枝垂れ桜かだと。普通のソメイヨシノとか、その対比が大変着目点があるんですけれど。印象深い影なんかもあるんですけれども、建物の表現と、植え込みの立体感っていうのが、精密じゃないので正確じゃないので、ちょっとこう、そこを、損してるっていう。木の良

さが生きないような気がしますね。
（吉岡）何かそこの描写ここ何となく綺麗だったし、それをそのまま描きましたっていう感じですけども。この絵の中で、一番綺麗だなあと思うのは地面の部分です。その割に建物の屋根の赤とか、の部分がすごく生な感じ、もう少しなんか深みがあるといいんだけど。本当に、紙の上に薄く赤を一層かけただけですっていう感じの。色にしか見えないんで、そういうところ。それから右っ側の枝垂桜かなんかのところの色の出し方なんかも、もう少し工夫があると。深く色が見えてくるのかなあと思います。

№39　武田　智幸「夕闇のキララホール」
（岡部）これは夜の室内の光っていうものが非常に印象深く描かれていて、独特の味わいを出してると。思います。あとは、全体的な構図とか色付けとかそうところが未成熟かなっていう気がしますね。

（吉岡）これ、これはもう、それぞれの描写がちゃんとできる人なんだろうけれども構図の問題ですよね。右っ側建物の光の強さが左からの建物の中から見える複雑な形の光の面白さを殺しちゃってる感じがします。どこが一番面白いかっていうのを、自分でよく反芻して、そこが綺麗に見えるように構成されるといいのかな。

№40　山﨑　國生「真アジと柚子」（水彩）
（岡部）これ一生懸命書いてあって、なかなかの技術力もあるんじゃないかなと思って。評価したいんですけれども、もう少し大きな画面で力のこもった、力作というものを期待したい
（吉岡）ちょっと気になったのが２ヶ所ありまして、一つが、なんだろう。スダチかな、これ柑橘類の葉っぱの部分の色です。何となく嘘っぽい色になってると思います。あとはてテーブルの描写の仕方が、何だかちょっと。木なんだろうけれども、下の方はいいとして上の方の表現が何かぐちゃぐちゃして、はっきりしないと。その２ヶ所がすごく難しく、絵を見る方に難しくさせてるんですね、できれば、３センチぐらい真ん中のカゴを上に上げて、狭い側のテーブルをやや広め、奥のテーブルをやや狭めにすると、描きやすくなると思います。こういうテーブルなり床面なりが手前から向こうに行く場合は、手前側の方が圧倒的に描きやすいんですよ。後ろの方は、ものすごく描きにくいんです。だから、手前からの書きやすい部分をやや広めにして、遠くの部分は、やや狭めにする方が表現として描きやすいし、効果的にもなるということはいえると思う。

№51　堀　由美子「広徳寺へ遠足」（パステル）
（岡部）全体の雰囲気とか。楽しさとか、華やかさはいいんですけれども、絵としてのまとまりとか描きこみというものが、やはり不十分ってないかなと思います。
（吉岡）やっぱり１個１個の表現が未完成感があるんですよね。ここから、描いていって

いくことによってその人の見方が、出てくると。逆に言うと、作者の人も、自分がどんどん描いていくことによって、自分が今まで、ここが綺麗だと思ってたのはこういう理由からかっていうようなことを確認することができると思うんですけれども、その前で、制作が中断してしまっているのがちょっと残念な感じがします。テーマ自体はすごく面白いし、イチョウの下で子供たちがキャーキャー言ってる感じも楽しいと思いますんで、あとは、描き込みですね。

№52　中田　修　「おいしい空気だね～」（パステル）

（岡部）これもパステルだと思うんですが、そのパステルという特殊な画材を使って、畦道。特に、枯れ木の表現が見事なんですよね。絵としての完成度もあるですけれど。これでもっと大きな世界が表現できるかなっていうような、期待したい作品。

（吉岡）大変よく描き込まれているんですけれども、ちょっと描写が単純な感じがします。もう少し、何か表現に複雑なものが出てくるといいのかな。あと、ポイントになっている２人の人。人物の入り方が、これでいいのかっていうのはちょっと考えるべきところかなあとは思いますけどね。

№53　木村　初子「さくら」（水彩）

（岡部）類例の少ない縦長の構図で取り組んだ意欲作なんですけれども、独特な小さい小ぶりな花の繊細な色をうまく表現しています。ただ、滲みの表現があまりうまく成功してないような気がします。ねらい通りできてないかなっていうのが残念ですね。

（吉岡）水彩の表現としては大変巧みな方なんだと思うんですけれども、全体として、自分だったら左下の辺りなんですけれども、今どこでも構わないんですけれども、グーッと深いちょっと明度の低い暗い部分がグーッとあると、今の話の部分のピンクの綺麗な感じっていうのがもっと見えてくると思うんですね。そういう、その花の部分を綺麗に見せるための表現っていうのがもう少しなされていればなあとは思います。水彩の扱いとしては、大変なんていうかな。ある種オーソドックスなんですけれども、すごくよく手慣れた表現をされていると思います。

№63　榎本　スミ子「あじさいと野の花」（水彩）

（岡部）作者が持っている、或いは描こうとするイメージっていうのが、非常にはっきりしていることで、成功してるんじゃないかなと思います。そのタッチといい、色合いもいいねと思いますけれど、ただ、ガラスの花瓶の表現、ち描写が曖昧な感じがするので、全体としての、もう一つの信頼感っていうのが得られないというところがあってそこが残念

ですね。でも自分の世界を描いてると思います。
（吉岡）細かい丁寧な描写で描いていて、それなりに説得力のある画面になっています。私が気になるのは、下の台とそれから背景の、部分の間の線というのかな。あそこがあの位置でいいのかって言うのはすごく気になります。なんか、あそこに持ってくると。なんか花瓶というこのビンが、向こう側に落ちそうな感じがする。もう少しあれ、上に上げてあげた方がよかったかなあと思います。それと背景の淡い色の塗りわけですけれども、下の方に関して言えばもう少し色をあげてもよかったかなあと思います。

№、69　田嶋　清子「ジャーマンアイリス」（水彩）
（岡部）このアイリスの特有の花びらだとか、葉っぱっていうのは非常に、よく観察されていて、表現されていて、大変いい作品じゃないかと思うんですけどね。狙ってるのが大体描けていているのですが、それ以上に何かもう少しなんかテーマ性が欲しいかなっていう気がします。
（吉岡）非常にオーソドックスな意味での基礎力を感じる作品で、表現としても、大変、上手に表現されていると思います。ただもう一歩、どっかに、より魅力的な部分、要するにここでいうと、全体に。７割８割ぐらいのところまではすごくいい感じでできてるんですが、これをより、面白く表現するためにはどうしたらいいか。その辺をもう、ちょっと一つ。突っ込めば、すごくよくなるような気がします。基礎的な力は十分あるので、独自の見方みたいなものに至るための証言の深まりみたいなものが、あれば、なんて言うのかな。ちょっとよくなるというんじゃなくてはステージが上がるような気がするんですけどね。

※個別作品の審査員コメントは、作品を審査した後、それぞれの作品の特徴や改善点等を審査員が会場で作者のみなさんに語りかけるような形でお話ししていただいたものを文章に書き起こしたものです。そのため、言い回し等が口語体のまま標記されている部分もありますので、ご了解ください。

問合せ先：あきる野市中央公民館　℡５５９－１２２１

第7回あきる野市絵画展実行委員会委員名簿（順不同・敬称略）

会　　長	森　信保	（秋川美術協会）
副 会 長	伊藤 洋司	（三土会）
副 会 長	城　聖一	（秋川美術協会）
会　　計	鈴木 光弘	（70美会）
事務局長	濱中　斉	（美しいあきる野を描く会）
監　　事	坂本 美郎	（70美会）
監　　事	木内 重樹	（パステル同好会）
	森田 利明	（70美会）
	松村 和夫	（秋川美術協会）
	尾暮　亮	（三土会）
	鈴木 正光	（美しいあきる野を描く会）
	中田　修	（パステル同好会）
	横山 幸子	（一歩会）
	歯黒 弘子	（一歩会）

第7回あきる野市絵画展入賞・入選作品集

発 行 日　令和2年3月24日
発 行 者　第7回あきる野市絵画展実行委員会
あきる野市教育委員会
〒197-0814　東京都あきる野市二宮683番地
あきる野市中央公民館